フェイス・リスクと「不満表明」表現に関する一考察

－中国人 JSL 学習者・日本語母語話者・中国語母語話者の比較から－

梁 晨（専修大学大学院生）

1. はじめに

日本人と外国人が交流する際，言語や文化背景の違いによって，摩擦や誤解が生じることが予測される．摩擦や誤解が生じやすい言語行動について多く研究されてきたのは「依頼」，「断り」などであるが，「文句」，「苦情」，「不平」といった不満を表明する言語行動に関する研究はまだ少ない．とくに，中国人日本語学習者を対象とする不満表明表現の習得研究は，管見の限り見当たらない．そこで本研究は，人間関係に対立を生み出しかねない言語行動である不満表明表現の産出に注目し, 分析を行う.

2. 先行研究

日本語と他の言語の「不満表明」の対照研究によれば，日本語の不満表明表現はフェイス・リスクが低い傾向にある（鄭, 2005；崔，2009）．日本語母語話者と日本語学習者の不満表明表現の発話の対照研究の結果によると，日本語学習者の方はフェイス・リスクが低いことが多く（初鹿野・熊取谷・藤森，1996；朴，2000），場面によって典型的なパターンの使用ができないため, バリエーションの多い発話をしている（初鹿野・熊取谷・藤森，1996）.

李（2004）は韓国人日本語学習者と日本語・韓国語母語話者の不満表明表現を比較した．本研究で使用した意味公式は李（2004）の意味公式の分類方法に基づいて，予備調査で新たに現れたストラテジーを加えて，12 項目に分類する．変数を抑えるために，対象となる日本語学習者は第二言語環境の学習者に限定している.

3. 研究課題

以上を踏まえて, 本研究の課題は以下の 2 つに設定する.

a. 不満表明において，日本語母語話者と中国語母語話者の間に違いがあるか．ある場合，どのような違いがあるか.

b. 中国人日本語学習者は，日本語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしているのか.

4. 研究方法

本研究の参加者は, 以下の 3 グループの計 90 名の大学生・大学院生である.

日本人日本語母語話者（以下, JJ）30 名

中国人日本語学習者（以下, CJ）30 名

中国人中国語母語話者（以下, CC）30 名

談話完成テスト（DCT）で発話データを収集した．対象である中国人は全員日本語学習歴がなく，日本語学習者は全員日本語能力試験 N1 に合格している.

データ収集のためには,談話完成テスト（以下,DCT）を使用した.相手との社会的距離の近さ・遠さ,ことの深刻度の重さ・軽さ,相手の社会的地位の高さ・同等・低さで分け,それらを組み合わせ,全部で 12 場面を用意した.場面設定は以下の表 1 を参照されたい.

収集したデータを意味公式単位で分析を行った．意味公式は李（2004）の分類方法に基づいて, 一部筆者が加えたものである. 総計 14 の意味公式に分類される. それぞれは 1. 改善要求, 2. 命題内容の表出, 3. 理由・説明の要求, 4. 状況確認, 5. 条件提示, 6. 代償要求, 7. 遠まわしな不満表明, 8. 明示的な不満表明, 9. 理由提示, 10. 情報要求, 11. 前置き, 12. 不満を表明しない（12-①発話を行わない, 12-②許す, 12-③相手を気遣う）である.

表１　意味公式

場面	「社会的距離」「深刻度」「社会的地位」	内容
場面 1	近い・低い・同じ	仲がいい友達が約束の時間に 15 分遅れた.
場面 2	近い・低い・相手が上	Aがもらえる自信があったよく知っている先生の授業のレポートの成績がDだった.
場面 3	近い・低い・相手が下	後輩が約束の時間に 15 分遅れた.
場面 4	遠い・低い・相手が上	図書館で知らない年上の人が喋っている.
場面 5	遠い・低い・同じ	会ったことのない寮の隣人が夜中まで騒いでいる.
場面 6	遠い・低い・相手が下	研究室であまり親しくない後輩がずっと喋っている.
場面 7	近い・高い・相手が上	真面目に受けていたのに, よく知っている先生の必修の授業を落とした.
場面 8	近い・高い・同じ	仲のいい友達に必修の授業のノートをなくされた.
場面 9	近い・高い・相手が下	後輩に必修の授業のノートをなくされた.
場面 10	遠い・高い・相手が上	アルバイトの店長がシフトを間違えて伝えた.
場面 11	遠い・高い・同じ	クラスメートに必修の授業のノートをなくされた.
場面 12	遠い・高い・相手が下	レストランの店員にジュースをこぼされた.

以上の 12 場面の発話を 14 の意味公式に基づいて, 分析と考察を行っていく.

5. 分析と考察

5.1　社会的地位の高低

社会的地位の高低による各場面において, 日本語母語話者と中国語母語話者の発話に観察されることは, 以下のようにまとめられる.

(a) 相手の社会的地位が自分と同じである場合（場面 1, 場面 5, 場面 8, 場面 11）と自分より上である場合（場面 2, 場面 4, 場面 7, 場面 10）において, 日本語母語話者は, 中国語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしている傾向があると言えよう.

(b) 相手の社会的地位が自分より上である場合中国語母語話者は「前置き」と他の意味公式を複合使用することが多く, ポライトネスの度合いに欠けているとは言いがたい.

(c) 相手の社会的地位が自分より下である場合（場面 3, 場面 6, 場面 9, 場面 12）, 日本語母語話者は, 中国語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしている場面とそうでない場面は 2 つずつである.

つまり, 日本語母語話者は, 中国語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしているが, 相手の社会的地位が自分より下である場合, 日本語母語話者の発話のフェイス・リスクの度合いが上がる.

また, 社会的地位の高低による各場面において, 日本語母語話者と中国人日本語学習者の発話に観察されることは, 以下のようにまとめることができる.

(d) 相手の社会的地位が自分と同じ・自分より上である場合, 中国人日本語学習者が, 日本語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしている.

(e) 相手の社会的地位が自分より下である場合, 中国人日本語学習者は, 日本語母語話者よりフェイス・リスクの高い発話をする場面と低い場面はそれぞれ 2 つである.

つまり, 学習者の発話におけるフェイス・リスクの度合いは相手の社会的地位と一部関係していることがわかった. 相手の社会的地位が自分より下である場合, 学習者の発話のフェイス・リスクの度合いが上がる傾向にある.

以上をまとめると, 相手の社会的地位が自分より下である場合, 日本語母語話者の発話のフェイス・リスクの度合いが上がる. さらに, 中国人日本語学習者は日本では, 上下関係, 特に学校の後輩と先輩の上下関係は厳しい印象が強いため, 自分より社会的地位の低い人との会話は, それほどポライトネスに注意を払わず, フェイス・リスクの度合いが上がることが観察された. 母語話者の両グループのデータを見ると, 日本人にはそういった傾向が見られるが, 学習者は過剰認識をするため, ポライトネスの度合いが低いことに注意しなければいけない.

5.2　社会的距離の遠近

社会的距離の遠近による各場面において, 日本語母語話者と中国語母語話者の発話に観察されることは, 以下のようにまとめられる.

(a) 相手と社会的距離が近い場面（場面 1, 場面 2, 場面 3, 場面 7, 場面 8, 場面 9）において, むしろ日本語母語話者の方がよ

りフェイス・リスクの高い発話をする傾向にあった.

(b) 相手と社会的距離が遠いすべての場面（場面4, 場面5, 場面6, 場面10, 場面11, 場面12）においては, 日本語母語話者は, 中国語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしている.

つまり, 相手との社会的距離が近い場合, 中国語母語話者がよりフェイス・リスクの低い発話をしている傾向がある.

社会的距離の遠近による各場面において, 日本語母語話者と中国人日本語学習者の発話に観察されることは, 以下のようにまとめることができる.

(c) 中国人日本語学習者は日本語母語話者よりフェイス・リスクの高い発話をする傾向が見られるのは相手との社会的距離が遠い場面4〜6と, 場面3であった.

つまり, 相手との社会的距離が遠い場合, 学習者の発話のフェイス・リスクの度合いが上がる傾向にある.

5.3 深刻度の高低

深刻度の低い場面2と場面3, 深刻度の高い場面8と場面9除いて8場面で日本語母語話者の方がよりフェイス・リスクの低い発話をしていることがわかった.

したがって, 日本語母語話者と中国人日本語学習者のどちらがフェイス・リスクの低い発話をしているかは深刻度のみに影響されたとは言えないだろう.

また, 深刻度の低い6場面（場面1, 場面2, 場面3, 場面4, 場面5, 場面6）のうち, 中国人日本語学習者が日本語母語話者よりフェイス・リスクの高い発話をしているのは4場面であった. 深刻度の高い6場面のうち, 中国人日本語学習者が日本語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしている.

つまり, 深刻度の低い場合は, 中国人日本語学習者が日本語母語話者よりフェイス・リスクの高い発話をする傾向にある.

6. 結論

6.1 課題a

日本語母語話者は, 中国語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしているということが確認された. 12 場面のうち, 8場面でこの傾向が見られた.

(a) 日本語母語話者の発話

日本語母語話者は主にフェイス侵害行為（FTA）をしないことと, 複数の意味公式を組み合わせて使用することによって, フェイス・リスクを低くする.

日本語母語話者は, 中国語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしているという現象が見られなかったのは場面2, 場面3, 場面8と場面9である.

後輩が遅刻する場面3では, 4グループの間にあまり差がなく, 特に日本語母語話者の発話がフェイス・リスクが低いと言えない.

授業の成績に関わる場面2では, 日本語母語話者がフェイス侵害行為（FTA）をしない人が多かったが,「明示的な不満表明」の多用, 意味公式の組み合わせの使用が有意に少ない傾向にもあった. また, 中国語母語話者は緩和表現である前置きの多用と複数の意味公式の使用が多かった. したがって, 日本語母語話者は, 中国語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしていると言えない.

親しい人に必修の授業のノートをなくされた場面8と場面9では, 日本語母語話者は意味公式を単独使用する傾向にあったのに対して, CC は意味公式を組み合わせて使用する傾向にあった. したがって, この 2 つの場面ではそういった現象が見られなかった.

以上をまとめると, 課題 a の結果として, 日本語母語話者は, 中国語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしていることが明らかになったと言えよう. ただし, その例外もある. 相手と社会的距離が近い場面において, 日本語母語話者は中国語母語話者よりもフェイス・リスク高い発話をしている. また, 相手の社会的地位が自分より下である場合, 日本語母語話者の発話のフェイス・リスクの度合いが上がることも観察された.

6.2 課題b

中国人日本語学習者は, 日本語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしていると言えよう. 12 場面のうち, 8 場面でこの傾向が見られた. この傾向が見られなかったのは, 場面3, 場面4, 場面5, 場面6である.

(b) 中国人日本語学習者の発話

中国人日本語学習者は主にフェイス侵害行為（FTA）をしないことと, 複数の意味公式を組み合わせて使用することによって, フェイス・リスクを低くする. しかし, 中国人日本語学習者の意味公式の組み合わせの使用には, 初鹿野・熊取谷・藤森

(1996)が指摘した日本語学習者が場面によって典型的なパターンの使用ができないため, バリエーションの多い発話をしていることは見られなかった. 本研究の対象者は日本に数年滞在している学習者であるため, 日本社会にすでにある程度慣れており, 日本語のレベルもより高いことが理由として考えられる.

また, 相手との社会的距離, 社会的地位, ことの深刻度の3つの変数すべてが学習者の発話に影響をもたらす. 相手の社会的地位が自分より下である場合と相手との社会的距離が遠い場合, 学習者の発話のフェイス・リスクの度合いが上がる傾向にある. さらに, 深刻度の低い場合では, 中国人日本語学習者が日本語母語話者よりフェイス・リスクの高い発話をする傾向にある. 以下は場面ごとにわかることについて詳しく述べていく.

後輩が遅刻する場面 3 では, 前述したように, 特別に, 中国人日本語学習者の発話が日本語母語話者よりフェイス・リスクが低いと言えない.

図書館で喋っている知らない老人がいる場面 4, 深夜の寮内で人がうるさい場面 5 と研究室であまり親しくない後輩がずっと喋っている場面6の3つの場面に観察される共通的な特徴は, 日本人は何も言わず我慢する傾向にあり, 中国人は相手に注意をし, 改善を求める. したがって, 中国人日本語学習者はよりフェイス・リスクの高い発話をしていると言えよう.

また, 上記の場面4, 場面5, 場面6はすべて公共の場であり, 静かさを保つと期待されるところで騒いでいる場面である. 中国人がそのような騒ぐことに対する容認度が日本人より低いことがわかった.

以上のことをまとめると, 中国人日本語学習者の発話は相手との社会的距離, 社会的地位, ことの深刻度の 3 つの変数に影響され, 日本語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしている傾向にあることがわかる. また, 特定の日本と中国の社会的慣習が違う場合, 母文化の影響により, 中国人日本語学習者はフェイス・リスクの高い発話をしている傾向もある.

6. 3 まとめ

6. 1 と 6. 2 をまとめると, 日本語母語話者は, 中国語母語話者よりフェイス・リスクの低い発話をしているという傾向にあり, 中国人日本語学習者は, 日本語母語話者よりもフェイス・リスクの低い発話をしている傾向にあることがわかった. フェイス・リスクを低くする手段として, 主にフェイス侵害行為（FTA）をしないことと, 複数の意味公式を組み合わせて使用することがある.

ただし, その例外もある. 相手と社会的距離が近い場面において, 日本語母語話者は中国語母語話者よりもフェイス・リスクが高い発話をしている. また, 相手の社会的地位が自分より下である場合, 日本語母語話者の発話のフェイス・リスクの度合いが上がることも観察された.

また, 相手との社会的距離, 社会的地位, ことの深刻度の3つの変数すべてが学習者の発話に影響をもたらす. 相手の社会的地位が自分より下である場合と相手との社会的距離が遠い場合, 学習者の発話のフェイス・リスクの度合いが上がる傾向にある. さらに, 深刻度の低い場面では, 中国人日本語学習者が日本語母語話者よりフェイス・リスクの高い発話をする傾向にある. また, 日本と中国の特定の社会的慣習が異なる場合, 母文化の影響により, 中国人日本語学習者はフェイス・リスクの高い発話をしている.

参考文献

朴承圓（2000）. 不満表明表現使用に関する研究―日本語母語話者・韓国人日本語学習者・韓国母語話者の比較― 言語科学論集 東北大学文学部言語科学専攻, 4, 51-62.

初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子（1996）. 不満表明表現ストラテジーの使用傾向―日本語母語話者と日本語学習者の比較― 日本語教育, 88, 128-139.

李善姫（2004）. 韓国人日本語学習者の『不満表明』について 日本語教育, 123, 27-36.

崔東花（2009）. 不満表明とそれに対する応答―中国語母語話者と日本語母語話者を比較して― 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書, 218, 多文化接触場面の言語行動と言語管理, 接触場面の言語管理研究, vol. 7.

鄭賢熙（2005）. 日韓両言語における『不満表明』に関する一考察 ： 異文化による『もめごと』での行動および言語表現を中心として― 新潟大学国際センター紀要, 1, 63-71.